

南モラヴィアのクロアチア語

—— 言語の維持と社会的背景に関する一考察 ——

三 谷 恵 子

はじめに

現在のチェコ共和国南モラヴィア県ブジェツラフ郡に、1948年までクロアチア人が住民の多数を占める村一本稿ではこれらを「クロアチア人村」とする一があった。こんにちのオーストリアとの国境の北側に位置するフリーリシトフ Frielištov (現チェコ名 Jevišovka¹⁾ かつては Frjelišdorf / ドイツ名 Fröllersdorf あるいは Frolaychsdorf)、ドロポリェ Dobro Polje (現 Dobré Pole / ドイツ名 Gutfeld)、ノヴァプレラヴァ Nova Prerava (現 Nový Přerov / ドイツ名 Neuprerava) の三村である。ここで「クロアチア人」とは、祖先の出自に関係なく「クロアチア語」を日常的に使用し、クロアチア人であるという意識を持っていた人々を指す。また本稿の関心の中心であるそのクロアチア語とは、2節以下で述べるとおり、接触言語の影響下に変化しながらも、共同体の消失の時まで維持された南スラヴ語のチャ方言である。本稿ではこれを「モラヴィア・クロアチア語」と呼ぶ。

以下1. では南モラヴィアのクロアチア人の歴史と過去の研究について概観し、2. ではモラヴィア・クロアチア語の特徴を、チャ方言の一変種という視点から、ついで言語接触という視点から記述する。これらの言語事実をふまえて、3. ではモラヴィア・クロアチア語が使用されていた社会の状況について考察する。これらを通して、共同体における言語の維持と変化のあり方、およびそこに関わる社会的要因を考えるのが本稿の目的である。同時に、記述言語学と社会言語学のアプローチを組み合わせた言語研究の事例を示すことも、本稿の意図するところである。

なお、モラヴィアのクロアチア人と直接関係にあったと考えられる西スラヴ系言語には、南モラヴィア方言、チェコスロヴァキア時代のチェコ標準語、スロヴァキア語方言があるが、言語接触について考える場合、これらの中のどの言語変種が直接影響を与えたのかまでは明らかにしがたい面がある。そこで本稿では、これらの接触言語やその話者について言及する場合には、単に「チェコ語」「チェコ人」とする。スロヴァキア語・スロヴァキア人を含めてより広く言及する意図をもつ場合には「西スラヴ語」「西スラヴ系住民」とする。また地名は、現在のチェコ共和国に含まれるものについてはチェコ語式名称を用いるが、1948年まで残ったクロアチア人村については、冒頭に示したとおりのクロアチア語式名称を用いる。その他、必要に応じて「ミクロフ (ク Nikišpork / ド Nikolsburg)」のようにクロアチア名、ドイツ名を示す。

1 クロアチア人を追放した後の1950年に、近くを流れる Jevišovka 川の名称をとって改称した。

1. 移住クロアチア人の歴史とこれまでの研究

1-1. 移住の歴史

16世紀のバルカン半島北西部は、オスマン軍の侵攻とそれに伴う社会環境の悪化に苦しみ、一方モラヴィア、下オーストリア、西ハンガリー一帯は、それに先立つ15世紀のフス戦争やハンガリー・ボヘミア戦争、対トルコ戦争の影響などによる土地の荒廃と人口喪失から回復していなかった。この二つの社会状況が、領地の人口増加を望むオーストリアやハンガリー側の領主貴族と、よりよい生存環境を求めるクロアチアの小貴族や農民らの要求の一致を生み出し、16世紀を通じて現在のクロアチア内部から、シュタイヤーマルク、下オーストリア、モラヴァ川流域、西ハンガリーなどへクロアチア人が大量に移住した。その数は総計10万人を超え、クロアチア人が入植した集落の数は300にのぼるとされる⁽²⁾。南モラヴィアへの移住もこの民族移住の一部であり、また現在オーストリア東部に約2万人いるブルゲンラント・クロアチア人 (Burgenländische Kroaten / Gradišćanski Hrvati) も、この時期の移住者の子孫である (地図1、2参照)。

南モラヴィアへの移住は、当時この一帯の領主であったリヒテンシュタイン家によって行われ、モラヴァ川西側からディエ川流域、ズノイモまでの間にクロアチア人が入植した。クロアチア人のモラヴィア移住の歴史を調査したトゥレクによれば、“Under-Krabatten”



(Dolní Charvátý)、“Obern Krabattn” (Charvátská Nová Ves) といった名称が1530年代末の記録に現れ、また同じ頃の“Fröllersdorf” (フリーリシトフ) の領地管理簿の記録からに -icz で終わる姓などクロアチア人と思われる名前が記録されている⁽³⁾ ことから、この時期に最初のクロアチア人の入植が行われたと推定される⁽⁴⁾。この1530年代を最初の波として、50年代、70年

2 Ivo Cević, ed., *Enciklopedija Jugoslavije* 3 (Zagreb: Jugoslavenski leksikografski zavod, 1984), p. 533; August Kovačec, ed., *Hrvatska enciklopedija* 4 (Zagreb: Leksikografski zavod “Miroslav Krleža,” 2002), p. 303.

3 Adolf Turek, “Charvátská kolonisace na Moravě” (*Časopis Matice moravské*, no. 61, 1937), in Richard Jeřábek, ed., *Moravští Charváti – dějiny a lidová kultura: antologie* (Brno: Ústav evropské etnologie Masarykovy univerzity, 1991), pp. 119–187, pp. 130–133 [トウレクへの参照は Jeřábek によるアンソロジーのページを挙げる]; Kvetoslava Kučerová, *Hrvati u Srednjoj Evropi* (Zagreb-Bratislava: Matica hrvatska, Matica slovačka. Posebna izdanja, 1998), pp. 168–169.

4 トウレクが詳細を明らかにする以前には、クロアチア人のモラヴィアへの入植は1583～84年頃と考えられていた。これは、もともと1780年代のモラヴィアの地名研究から現れた見方で、こ



代と三回ほど移住が集中した時期があり、ドブロボリェ、ノヴァプレラヴァへの移住はこの1570年代に行われたとされる⁽⁵⁾。モラヴィアへの移住の規模は定かではないが、先行研究があきらかにした領地管理簿（urbar）や教会簿などの記録を総合すると、最大で数千人という規模ではなかったかと本稿筆者は推測する。また彼らがクロアチアのどこから来たかという問題も、記録がないために定かではないが、クロアチア人が入植した土地につけられた地名や水名、あるいは人名の特徴から、カルロヴァツの南を流れるクパ川 Kupa—コラナ川 Korana—ムレジニツァ川 Mrežnica の流域が有力とされている⁽⁶⁾。

南モラヴィアでクロアチア人が入植した痕跡のある村は20カ所近くあるが、それらでのクロアチア人の痕跡は、フリーリシトフ、ドブロボリェ、ノヴァプレラヴァを例外として歴史の中で消滅した。たとえば「クロアチアの」という形容詞が地名に残されているハルヴァーツカーノヴァーヴェス（Charvátská Nová Ves）は1570年のリヒテンシュタイン家の領地管理簿に現れており、おそらく当初はクロアチア人のみの共同体だったと考えられる。しかし200年後の1751年には、村の58世帯のうち「クロアチア人」すなわちクロアチア系の姓を

の考えをシェンベラ（Alois V. Šembera 1807–1882）など後の研究者がほぼそのまま受け継いだためである。シェンベラは1840年代半ばに、クロアチアのイリリア運動の中心人物の一人であったヴラズ（Stanko Vraz 1810–1851）に宛てて「リヒテンシュタイン家からドルンホレッツを譲渡されたトイフェンバッハ男爵（Christoph von Teuffenbach 1551?–1598）が1584年にクロアチア人を入植させた」と知らせている。Turek, “Charvátská kolonisace,” p. 142; Dragutin Pavličević, *Moravski Hrvati. Povijest – život – kultura* (Zagreb: Hrvatska sveučilišna naklada, 1994), p. 33.

5 Turek, “Charvátská kolonisace,” pp. 150–151; Kučerova, *Hrvati u Srednjoj Europi*, pp. 171–173.

6 Pavličević, *Moravski Hrvati*, 44ff.

持つ世帯は 28 に減少し、18 世紀末までにはクロアチア人の痕跡は消滅した⁽⁷⁾。16 世紀にはドイツ名で「クロアチア人村」(Krabotendorf) と呼ばれたパソフラーフキ (Pasohlávky/ク Pasoglavci/ド Weissstätten) でも、1574 年の時点で村の 19 世帯のうち 10 世帯がクロアチア人だったと推測されるが、やはり 18 世紀前半にはクロアチア人の存在は確認できなくなった⁽⁸⁾。クロアチア語が比較的長く維持されたフロホヴェツ (Hlohovec /ク Glagovac) では、1869 年に実施された国勢調査の頃にはクロアチア語を日常的に話す人口が 15%ほどあったが、それも 20 世紀初頭には消滅した⁽⁹⁾。このように、19 世紀に入る頃までには、クロアチア人が多数を占めるのはフリーリシトフ、ドプロボリエ、ノヴァプレラヴァの三村になっていたとみられる。

1-2. クロアチア人村の消滅

上記の三村はオーストリア帝国の中で、また第一次大戦後はチェコスロヴァキア共和国の中で、クロアチア語を維持し、クロアチア人というアイデンティティを保持した。1930 年の時点では三村合計でクロアチア人 1825 人、ドイツ人 522 人、チェコ人 475 人、そのうち最も人口が多かったフリーリシトフでは、1268 人の住民のうち 938 人がクロアチア人、213 人がドイツ人、108 人がチェコ人という構成であったという⁽¹⁰⁾。1934 年 9 月にはクロアチア人移住 350 周年の記念式典がフリーリシトフで行われ、当時チェコスロヴァキア国民議会議長であったスタニェク (František Staněk 1867–1936) 率いるチェコ議会の代表団や、チェコスロヴァキア在留ユーゴスラヴィア大使などが列席するなど、クロアチア人村がチェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアの友好の象徴として扱われる出来事もあった⁽¹¹⁾。しかしそれから間もない 1938 年のミュンヘン会談の結果、南モラヴィアのドイツ圏—オーストリアと接するミクロフ(ク Nikišporok/ド Nikolsburg)、ズノイモ(ク Znojmo/ド Znam)、ノヴィービストシツェ(ド Neubistritz) の三郡は、ニーダーダナウ大管区に併合された。ミクロフ郡

7 Marie Vránová, “Historie Charvátské Nové Vsi” [http://www.postorna.info/historie_charvatska_nov_a_ves.php] (2010 年 8 月 1 日閲覧)。ただしもちろん、姓と民族的帰属あるいはその使用言語はかならずしも一致しない。フリーリシトフに最後まで残った「クロアチア人」の中にも Regen, Schneider といった姓がある。したがってこうした記録は村の人口構成の変遷を推測する手がかりにとどまるといえよう。

8 Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 47.

9 Josef Breu, “Prostorni opseg i posljedice za sliku naselja,” in Ivan Kampuš, ed., *Povijest i kultura gradišćanskih Hrvata* (Zagreb: Nakladni zavod Globus, 1995), p. 94. Hlohovec では 1923 年に最後のクロアチア語話者が亡くなったという。Marie Vránová, “Chorvaté na Moravě.” [http://www.postorna.info/historie_chorvate_na_morave.php] (2010 年 8 月 1 日閲覧)。

10 Josef Lawitschka, *Lipo naše selo. Paměti jihomoravského Chorvata* (Praha: Aequitas, 2005), p. 92. 村の人口についてより詳しくは 3-2. で述べる。

11 1934 年が移住から 350 年とされたことについては注 4 を参照。この記念式典についてはクロアチアのザグレブ発行『朝刊』紙が全面記事を掲載している。“350 godina Moravskih Hrvata. Jubilarne svečanosti u tri hrvatska sela,” *Jutarnji list*, 16.09.1934, p. 17. チェコでも地元紙がその様子をクロアチア人の歴史とともに紹介している。またユーゴスラヴィア—チェコスロヴァキア同盟ザグレブ支部の 1935 年の年報にもこの記念行事関連の記事が掲載された。*Izveštaj o radu u godini 1934* (Zagreb: Jugoslovensko-čehoslovačka liga Zagreba, 1935), pp. 11–12.

に位置していたクロアチア人村も必然的に第三帝国の一部となり、住民たちはドイツ国家への奉仕を余儀なくされ、NSDAP の党员になった者、SS 隊員になった者もいた⁽¹²⁾。戦後国境が復活し、ふたたびチェコスロヴァキア国民となったクロアチア人たちに対して 1948 年 6 月、同年に政権を掌握したチェコスロヴァキア共産党は強制移住の処分を下した。「長年におよぶドイツの影響のもとで、ドイツ人への抵抗心を失ってしまった」クロアチア人を「新たな、純粋にチェコ的環境の中ですみやかにチェコ社会に適応させるべく」⁽¹³⁾ という命令に見られるように、ナチス協力者を出したクロアチア人共同体の集団の罪を問ひ、国境付近から「信用できない(nespolehliví)」住人を排除する目的があったと考えられる⁽¹⁴⁾。これによって最終的に 1950 年までの間に、クロアチア人たちはモラヴィア北部の約 110 の村にばらばらに移住させられ、移住から 400 年続いたクロアチア人共同体は消滅した。処分の対象となったクロアチア人は三村合計で 2000 人余りであり、村に残留を許されたのは数十名であった。また強制移住の執行の直前に約 200 人ほどが国外に逃れたという⁽¹⁵⁾。

強制移住されたモラヴィア・クロアチア人たちに対して、1999 年、チェコ政府は遺憾の意を表明した。

1-3. 過去の言及と先行研究、および本稿の記述の位置づけ

18 世紀までのクロアチア人共同体に対する外部の関心がどれほどのものだったかについては資料がほとんどないが、19 世紀に入ると、故郷から隔たりドイツ語圏の中でクロアチア語とクロアチアの文化伝統を保っているモラヴィアの村の様子が、大衆メディアを通してクロアチアに伝えられるようになった。クロアチアの 19 世紀前半の民族運動であったイリリア運動の中核メディア『イリリアの明星 (Danica Ilirska)』には、“Moravski Hãrvãti” (モ

12 調査協力者談話（調査協力者については注 27 を参照）。Ivan Dorovský, “Poválečné osudy jihomoravský Charvátů,” in Ivan Dorovský, ed., *Charvátí ještě žijí mezi námi* (Brno: Společnost přátel jižních Slovanů v České Republice, 1996), p. 47; Richard Jeřábek, “Moravští Charvátí po 450 letech,” in Jana Plichtová, ed., *Minority v Politika. Kulturne a jazykové prava*. Bratislavské sympóziium II (Bratislava: Česko-slovenský výbor Európskej kultúrnej nadácie, 1992), p. 216.

13 Jeřábek, *Ibid.*

14 チェコ国内のドイツ人（クロアチア人村に住んでいたドイツ人も含めて）が 1945 年の終戦と同時に国外に追放されたのに対してクロアチア人の追放までに時間がかかったのには、カトリック系の人民党などいくつかの保守的政治勢力がクロアチア人の処罰に反対していたことなどの要因があったと考えられる。なお 1948 年はユーゴスラヴィアのティトーとスターリンとの関係悪化が決定的となりティトーがコミンフォルムを追放された年でもある。この事態がスターリンの指導下にあったチェコ共産党の対クロアチア人政策にも影響を与えた可能性も考えられるが、その直接の関連を示す史料は本稿筆者には未知である。ただしクロアチア人への追放命令は同年 6 月にすでに出されており、一方ティトーがコミンフォルムを除名されたのは 8 月であることから、後者の出来事とは別にチェコ共産党がクロアチア人追放の最終決定を下していたと考えられる。クロアチア人の強制移住の経緯についてはたとえば、注 12 にある Dorovský, “Poválečné osudy jihomoravský Charvátů” に記述がある。ただし当事者のクロアチア人たちは、追放の直接の原因を「自分たちが（1946 年の選挙で）共産党を支持しなかったから」と語っている（調査協力者談話および注 27 にある ORF 録音資料による）。

15 調査協力者談話。

ラヴィアのクロアチア人) という記事が掲載され、その寄稿者は「人はここで、かれらの故郷、すなわちあの美しいロマンティックなクロアチアにいるかのように感じるだろう」⁽¹⁶⁾と述べている。19世紀後半から末期にかけては、ククリェヴィッチ-サクツィンスキ (Ivan Kukuljević Sakcinski 1816–1889)、クライッチ (Vjekoslav Klaić 1849–1928)、ミルチェティッチ (Ivan Milčetić 1853–1921) ら、クロアチアの歴史家や民族学者がこの地を訪れ、クロアチア人の風習について記述している⁽¹⁷⁾。異民族に囲まれて数百年間自分たちの文化を保ってきたクロアチア人村の様子は、チェコの学者、たとえば A. シェンベラの関心も引いた⁽¹⁸⁾。シェンベラの1864年の『チェコスロヴァキア基礎方言学』の中にも、ごく短くだがモラヴィアの南端にクロアチア語使用域があることが記されている⁽¹⁹⁾。ドロボリエの教区司祭だったマレツ (Alois Malec 1855–1922) は、1890年代末から1910年までの間に数回に渡り、クロアチア人村についてのエッセイをチェコの民族学誌『チェコの人々』に寄稿した⁽²⁰⁾。チェコスロヴァキア時代には、トゥレクがクロアチア人の移住の歴史を明らかにし⁽²¹⁾、ヴァージニーが言語学の立場から記述研究を行った⁽²²⁾。その後、第二次大戦後にクロアチア人共同体が解体されてから民主化するまでの間、チェコ国内でのモラヴィア・クロアチア人についての研究は民族学の分野にわずかに見られる程度⁽²³⁾であり、またクロアチアやブルゲンラント・クロアチア人社会においても、かつてのクロアチア人村の住人たちとの連絡が途絶えたこともあり、1980年代末までの間の学術的研究には空白がある。1990年代になって、チェコならびにクロアチアの研究者がモラヴィアのクロアチア人村の歴史を記録に残す試み

-
- 16 J. N. Enders, “Moravski Hãrvati,” *Danica Ilirska*, 1842, no. 15, pp. 58–59. なおこの記事は “Iz Pilgera od J. N. Enders” とされており、1841年にスラヴォニアのカルロヴァツで刊行が始まったドイツ語の定期刊行物 *Der Pliger* に J. N. Enders という人物が発表した記事がクロアチア語に翻訳されたものと考えられる。ただし誰が翻訳したかは不明である。
- 17 もっとも詳細な報告はミルチェティッチによる。Ivan Milčetić, “O Moravskim Hrvatima,” *Vienac*, no. 27, 29, 30–32, 34, 36, 45–46, 48–50, 52 (Zagreb, 1898). これらは以下の形で一冊にまとめて再版された。O hrvatskim naseobinama u Moravskoj, Donjoj Austriji i Zapadnoj Ugrskoj (Zagreb: Dionička tiskara, 1899). 本稿での参照はこの1899年のものによる。
- 18 注4を参照。シェンベラは1848年にブルノ発行の『週刊誌 (Týdeník)』にもクロアチア人村についての記事を掲載している。Alois Šembera, “Osady chorvátské w Morawé,” in Jeřábek, *Moravští Charváti*, pp. 29–33.
- 19 Alois Šembera, *Základové dialektologie československé s příklady všech řečí slovanských a různoreččí českých, moravských a slovenských* (Videň: Nákladem spisovatelovým, 1864), p. 34.
- 20 Alois Malec, “Moravští Charváti,” *Český lid*, 1898, no. 7, pp. 273–276, 382, 456; “Kroj moravských Hrvátů,” *Český lid*, 1900, no. 9, pp. 15–28, 413–418; “O moravských Hrvátech,” *Český lid*, 1910, no. 19, pp. 383–386.
- 21 注3を参照。
- 22 Václav Vážný, “Mluva charvátských osad v republice Československé,” *Československá vlastivěda*. Díl III, Jazyk (Praha: Sfinx, 1934), pp. 518–523; Václav Vážný, *Čakavské nářečí v slovenském Podunají. Spisy zemedelského muzea v Bratislave, svazok 2* (Bratislava: Zemedelské muzeum, 1927).
- 23 たとえば Richard Jeřábek, “K otázce vlivu charvátské kolonizace na lidovou kulturu na jižní Moravě,” *Zprávy Oblastního muzea jihovýchodní Moravy v Gottwaldově* (Gottwaldov: Oblastní muzeum jihovýchodní Moravy), 1966, no. 4–5, pp. 207–215.

を行った⁽²⁴⁾。チェコでは民族学の立場からの研究も 90 年代に行われた⁽²⁵⁾。

以上がモラヴィアのクロアチア人についての過去の言及ならびに研究の概観であり、この中で、本稿の関心であるモラヴィア・クロアチア語を専門的に扱ったものは、この言語がコミュニティで機能していた時代になされた上記のヴァージニーの記述研究につきる。1990 年代以後では、クロアチアのロンチャリッチが、かつてのクロアチア人村の住民数名から集めたデータを用いて、クロアチア語方言学の立場から記述している⁽²⁶⁾。本稿 2 節では、これらの先行研究を参照しつつ、筆者が収集した資料⁽²⁷⁾をもとに、1948 年に村が解体する前のモラヴィア・クロアチア語がどのようなものであったかを再構成する。そのさい、先行研究が重視したこの言語に固有の、すなわちチャ方言の特徴のみならず、言語接触に起因する変化という面にも注目する。これらを順次記述し、モラヴィア・クロアチア語が、言語接触による影響を受けながらも、もとのチャ方言の特徴を保持した言語であることを示し、3 節の考察の準備とするのが次節の目的である。

24 Jeřábek, *Moravští Charváti*; Pavličević, *Moravski Hrvati*; Dorovsky, ed., *Charváti ještě žijí* など。

25 Eva Večerková, “Výroční obyčje moravských Čahrvátů,” *Folia Ethnographica*, 1992, no. 26, pp. 53–82; Zdeňka Jelínková, “Lidový tanec moravských Chorvatů na Mikulovsku ve vztahu k sousedním oblastem” [www.rmm.cz/regiom/2005/chorvati.pdf] (2010 年 8 月 1 日アクセス) など。

26 Mijo Lončarić, “Prilog istraživanju govora moravskih Hrvata,” *Kajkaviana i Alia* (Zagreb-Čakovec: IHJ Zrinski, 2005), pp. 427–435.

27 本稿でのモラヴィア・クロアチア語の記述は、以下の 3 種の資料に依拠する。

A) 調査協力者からの直接資料。調査は 2007 年 9 月～2009 年 3 月の間に 4 回、ウィーンの調査協力者宅において行った。調査協力者は 1933 年フリーリシトフ生まれの男性、父は同じ村出身、母はドロボリェ出身のクロアチア人で、家庭で母語としてクロアチア語を習得した。小学校ではドイツ語、また戦後の 2 年間通った中学校ではチェコ語で教育を受けている。1948 年までフリーリシトフに住み、同年 6 月、強制移住が執行される直前に家族とともにオーストリアに逃れ、現在までウィーンに住む。言語調査は、語彙リストや例文による聞き取りから始めたが、一定時間以上語彙の聞き取りなどを続けていると調査協力者に疲労と混乱が生じ、「思い出せない」状態になることから、第二回め以後は、自由談話（昔の思い出話、写真や動画の説明、滞在中の雑談など）を採集する形式とした。それらを、下記の録音資料や文字資料と照合して、本稿の基本的な言語資料とした。本稿で例文として挙げるものは、特に注記がない限り調査協力者によるものである。なお言語データ以外に、調査協力者からはクロアチア人村の歴史に関する資料や写真、その他多くの情報提供を受けた。切に感謝する。

B) 録音資料：ORF（オーストリア放送）のブルゲンラント・クロアチア語番組内での談話（2008 年 2 月 3 日、2007 年 3 月 22 日、2006 年 6 月 11 日、2004 年 4 月 7 日放送分）、話し手は上記の調査協力者の他、フリーリシトフのもと住民のクロアチア人男性（IR）、女性（MČ）；*Tondokumente aus dem Phonogrammarchiv der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Gesamtausgabe der Historischen Bestände 1899–1950, Series 1/1. Croatian Recordings 1901–1936* (Vienna: OAW, 2009), CD および解説資料。

C) 文字資料：Josef Lawitschka, *Lipo Naše Selu*; Vážný, “Mluva charvátských osad” 中の記述テキスト；Alois Malec, Franjo Venhuda, *Molitve i pjesme pro ljude hrvatski v Moravi* (Brno: Benediktínska tiskara, 1895)。

2. モラヴィア・クロアチア語の特徴

2-1. チャ方言としてのモラヴィア・クロアチア語

2-1-1. チャ方言について

モラヴィア・クロアチア語がチャ方言（クロアチア語で *čakavsko narječje*）に属することは、上記のミルチェティッチ、ヴァージニーらによってつとに指摘されてきた。チャ方言とは、疑問代名詞に *ča* が用いられる特徴によって、同じく疑問代名詞に *što, kaj* が用いられることからそれぞれシト方言、カイ方言と称される隣接諸方言と区別される、南スラヴ語の一方言タイプの名称である。チャ方言は、共通スラヴ語時代末期（9～10世紀頃）以降、南スラヴ語群が分化していく中で14世紀頃までにおおよその特徴が形成され、1-1. に述べたクロアチア人の北部への移動が起こる16世紀頃までは、現在のクロアチア西部からボスニアとの国境よりやや東の辺りまでの地帯をその使用域とした⁽²⁸⁾。この一帯から移住したブルゲンラント・クロアチア人たちの言語にチャ方言の特徴が強く示されるのは、そのためである。しかし16世紀以後のバルカン半島北西の人口移動の結果、チャ方言の使用領域は、こんにちでは、クロアチアのダルマチア中部以北の海岸沿いと島部、イストラ半島、それに内陸部のごくわずかな範囲に限られている。

これまでのチャ方言に関する研究では、固有のアクセント体系、疑問代名詞 *ča* の使用、**b*, **b̂* の反映形（とくに「弱い位置」での母音化）、**č* の反映形、**tj* および **dj* の反映形、**čr* の保持、特定の子音の後の **e>a* への変化などが、チャ方言を特徴づける指標とされてきた⁽²⁹⁾。そこで以下2-1-2. でまず、これらの指標に参照しながらモラヴィア・クロアチア語の音韻特徴について述べ、次に2-1-3. で音韻以外、具体的には名詞および動詞形態統語論的特徴を、他のチャ方言との異同という観点からまとめる。これらをもってチャ方言としてのモラヴィア・クロアチア語の記述とする。

28 Dalibor Brozović, Pavle Ivić, *Jezik srpskohrvatski/hrvatskosrpski, hrvatski ili srpski*. Izdavač iz II izdanja Enciklopedije Jugoslavije (Zagreb: Jugoslavenski Leksikografski Zavod “Miroslav Krleža,” 1988) [以下 Brozović & Ivić とする], pp. 8–9, 80–81.

29 Brozović & Ivić, pp. 82–83. 従来のチャ方言研究は、主として、19世紀後半から20世紀末までの「セルビアクロアチア語方言学」の中でシト方言やカイ方言との差異という観点から行われ、音韻面を中心に10～30ほどの特徴が示唆的なものとして挙げられた。たとえば Milan Rešetar, “Die Čakavština und deren einstige und jetzige Grenzen,” *Archiv für slavische Philologie*, Bd. 13 (1891), pp. 108–109; Božidar Finka, *Naputak za ispitivanje i obrađivanje čakavskih govora. Hrvatski dijalektološki zbornik 3* (Zagreb: HAZU, 1973), 5ff; Josip Lisac, *Hrvatska dijalektologija 2. Čakavsko narječje* (Zagreb: Golden marketing-Tehnička knjiga, 2009), p. 17. しかしチャ方言は島や海岸部、ブルゲンラントなどの移住先といったような非連続的な場所で局地的に用いられてきたため、すべてのチャ方言に共通し、他の方言には見られないというような排他的特徴があるわけではなく、むしろ複数の特徴を部分的に共通しながら、全体として一つの方言グループを形成する。上に挙げたものは、もっとも多くのチャ方言に共有され、通時的にはチャ方言が形成される過程の古い時代の変化とされる中心的特徴である。チャ方言の「共通特徴」の問題についてはたとえば Willem Vermer, “On the Principal Sources for the Study of Čakavian Dialects with Neocircumflex in Adjectives and e-presents,” in Ardiaan A. Barensten, ed., *Studies in Slavic and General Linguistics 2* (Amsterdam: Rodopi, 1982), pp. 282–283.

なおモラヴィア・クロアチア語には正書法がなかったため、本稿での表記は現代クロアチア標準語の正書法に準拠し、母音の長短も文字で示さない。ただしこの言語に現れる二重母音は、ie, uo のように発音されたものについてはそのように示す。音節末の *l は v と表記する。以下の言語記述の中では、表記の簡略化のため下記の略号を用いる：

MoCro モラヴィア・クロアチア語 BrCro ブルゲンラント・クロアチア語⁽³⁰⁾

Čak チャ方言 Št シト方言 StCro 標準クロアチア語 StCz 標準チェコ語

2-1-2. 音韻的特徴

(1) 母音とアクセント体系

MoCro の母音素は /i/i:/e/e://a/a://o/o://u/u:/ で、高母音は [i][i:]⁽³¹⁾、[u][u:]、低母音は [a][a:] で実現されるが、中高の /e//o:/ はアクセントの有無にかかわらず [je]、[jo] と上昇二重母音化する。/e (:)/ および /o(:)/ の二重母音化は BrCro にも顕著に見られ、また本国のチャ方言にも広く観察される⁽³²⁾。またチャ方言の二重母音化は原則として本来の長母音に生じるとされるが、MoCro では短母音でも二重母音化を起し、/e//o/ の自由変音のように現れていると思われる：skruoz diboku vuodu 「深い水の中を通過」；zieli su nam se naše papire [...] muorame čiekat 「私たちの書類を全部取り上げ [...] 私たちは待たなければならぬ (と)」。二重母音化は (3) に述べる *ě の反映形の /e(:)/ にも適応される。

チャ方言のアクセントは、母音の長短と音調によって区別される3つのアクセント型、および共通スラヴ語時代のアクセント位置の保持によって特徴づけられる⁽³³⁾。しかしながら、MoCro がコミュニケーションの言語としての機能を失ってすでに60年を経ている現時点で、筆者の調査資料から一定のアクセントパターンを再構成することはできなかった⁽³⁴⁾。ここ

30 ブルゲンラント・クロアチア人社会ではチャ方言が優勢だが、シト方言、カイ方言が用いられる地域もある。これは異なる方言地域から人々が移住してきたためである。しかしここではチャ方言変種についてのみ言及するので、BrCro とした場合、この地域で用いられるチャ方言を意味するものとする。

31 ロンチャリッチは /i/ に側音の前で位置異音 [ɯ] があると指摘している。Lončarić, “Prilog,” p. 430. しかし本稿筆者の資料の範囲では聞き取れなかった。むしろ同じ位置（側音の前）の短母音 /o/ が [ɯ] になる場合があった：volbi [v ɯ wbi] 選挙；sme volili [v ɯ lili] 「選んだ」(IR, MČ)。調査協力者の発音にはそのような特徴は観察されなかった。

32 Milan Mogaš, *Čakavsko narječje: fonologija* (Zagreb: Školska knjiga, 1977), p. 26. 本稿筆者が継続調査中の BrCro でも観察される。BrCro の先行研究ではたとえば Gerhard Neweklowsky, “Hrvatska narječja u Gradišću i susjednim krajevima,” in Kampuš, ed., *Povijest i kultura*, pp. 439, 447.

33 Mogaš, *Čakavsko narječje*, pp. 23–25; Brozović & Ivić, p. 83; Keith Langston, *Čakavian Prosody: The Accentual Patterns of the Čakavian Dialects of Croatia* (Bloomington: Slavica, 2006), p. 25. ただし注 29 に述べたことはアクセントにもあてはまり、チャ方言内部でもかなり地域の変異が見られる。

34 ヴァージニーは自らの資料にアクセント記号を付しているが、それに対しても、1930年代初めにブラチスラヴァ周辺のクロアチア人の言語を調査したイヴシッチが個別の問題点を指摘しており、この当時でも、遠隔地に移住したクロアチア人の言語のアクセント調査は容易ではなかったと推察される。Stjepan Ivšić, “Hrvatska dijaspora u 16. stoljeću i jezik Hrvata Gradišćanaca (Priredio i dijelom obradio Božidar Finka),” in *Izabrana djela iz slavenske akcentuacije* (München: Wilhelm Fink, 1971), pp. 755–757.

ではただ、調査協力者の発音でも、特定の語彙で母音の長短の区別と音調の上下が顕著に観察され、本来あったアクセントパターンが示唆されることのみを指摘しておく⁽³⁵⁾:znat [znat] 知っている (不定詞) — znam [zà:m] 私は知っている — sme znali [smezná:li] 私たちは知っていた。

(2) ča の使用および *_ь, *_ъ の反映形

チャ方言の名称の由来である、疑問代名詞 ča「何?」の使用は MoCro に関するすべての資料で確認される。ča は関係代名詞としても用いられる: Turek, ča je to se napisav...「それを全部書いたトゥレクが…」。なお否定「何も(ない)」は ništ、「何か」は ništo となる: lietos ništ nisam dielav「今年は私は何もしなかった」; ništo je tuočiv sako lieto「(彼は)毎年いくらか注いだ」(ここでは「資金を出した」の意味)。

ča は *čь から形成されたもので、通時的には、共通スラヴ語時代の *_ь および *_ъ が母音化した変化の中に位置づけられる。チャ方言では、いわゆるハヴリークの法則にしたがって *_ь, *_ъ は 11 世紀頃には「弱い位置」で消失し、「強い位置」では、中舌広口の母音に融合した後 1300 年頃にはほとんどが a となった⁽³⁶⁾。*_ь, *_ъ > a の変化はシト方言と共通するが、チャ方言では起源的に弱い位置にあった *_ь, *_ъ でも消失せずに母音化した場合があり、ここに *čь > ča の形成、あるいはまたチャ方言にしばしばみられる kade (< *kъde, Št/StCrogdje)「どこに」、va/vo (< *vъ)「〜へ」(Št > u)、manom「私(造格形)」(< *mъnojo, Št mnom)などが結びつけられる⁽³⁷⁾。MoCro でこれらに該当する例は kade ['kade] / kadien ['kadien], va [va], manu ['manu:] となる: kadien je žena?「奥さんはどこだ?」(ただし kadien は「いつ、〜の時」の意味でも使用される: kadien je biv sako lieto kiritof「毎年教会記念祭があった頃は」); va Frielištofi「フリーリシトフで」; Odi s manu「私といっしょにおいで」。

(3) *ě の反映形

チャ方言の *ě の反映形は、地域によって i あるいは e、あるいは i と e が相補分布するパターンとなる。i と e が相補分布するパターンでは、*ě に後続する音節が歯茎音 /t, d, s, z, n, l, r /+a, o, u または Ø/ の環境で *ě>[e(:)] となり、それ以外の環境で [i(:)] になるという「メイヤーとヤクビンスキーの法則」⁽³⁸⁾ が有効であることが知られている。BrCro のほとんどがこのタイプに属し、MoCro の *ě の反映形もほぼこのメイヤー・ヤクビンスキーの法則に一致する。ただし反映形が /e(:)/ になる場合には、上記(1)に述べたように、しばしば二重母音化して [ie] となる—

35 短母音のアクセントは IPA (2005 年版) のストレス記号で、長母音のアクセントは上昇調を [á:]、下降調を [à:] のように記す。

36 Brozović & Ivić, pp. 8–9.

37 Mogaš, Čakavsko narječje, p. 21. なおシト方言でも、チャ方言と共通して (1) 語頭音節で新たに短い下降調を得た場合 (Št tama < *tъma)、(2) 語頭の m, l の後 (Št Čak magla < mъgla)、(3) *_ь, *_ъ が消失すると語頭に / 摩擦音 + 閉鎖音 + 共鳴音 / の連続以外の 3 つ以上の子音連続が生じる場合 (Št Čak daska < *dъska, stablo < *stъblo)、弱い位置にあった *_ь, *_ъ が母音化した。したがってここでいうチャ方言の弱い位置での母音化は、これ以外の、チャ方言に固有の変化である。

38 Brozović & Ivić, p. 82; Lav Jakubinskij, “Die Vertretung des urslavisch. ě im Čakavischen,” *Zeitschrift für slavische Philologie*, Bd. 1 (1925), pp. 381–382.

/e(:)/ になる例 : lieto (<*lěto; Št ljeto), susjed (<*sq+šěsti; Št susjed), miesto (<*město, Št mjesto), ciela/cielo (<*cělъ; Št cijel/cio), vienac (<*věньць) など

/i(:)/ になる例— mliko (<mlěko<*melko; Št mlijeko), grih (<*grěxъ; Št grijeh), dica (<*dětъ; Št djeca), rič (<*rěčъ; Št riječ), misec (<*měsęcъ; Št mjeseć), tit (<*xotěti, Št htjeti) など

(4) *dj, *tj の反映形

*dj の反映形はチャ方言では j となり⁽³⁹⁾、MoCro でも同じ形が観察される : mlaji < mlad「若い」の比較級 (Št mladi)。ただしヴァージニーは「モラヴィア・クロアチア語には破擦音化 (/dz/ のような音になる) はない」としているが、ロンチャリッチは andjel, govied'e などを挙げており⁽⁴⁰⁾、筆者も rodjenje [ruodʲenie], rodjeni [ruodʲeni] (<roditi, 典型的なチャ方言形では rojenje, rojeni) という例を確認した。BroCro の地域変種にも *dj>/dj/ となる例がある (/medja/⁽⁴¹⁾ < *medja「境界」, rod'a:k「親戚」⁽⁴²⁾)。

*tj (および *kt') の MoCro での反映形は ć [c] で実現される : sviće [svice] (<*světja), nuoč (<*noktъ)。この [c] の発音は ćaća [cà:ca]「父」、ćeme [ceme] (tit「～したい」の 1 人称複数形) などにも現れる。この [c] 音は BrCro にも顕著に観察されるものである。

(5) *čr の保持および *ę の反映形

*čr の音連続は、シト方言でこれが cr に変化し (Št crn < *čьrнь)、チャ方言では保持されたという示差の関係から、チャ方言の特徴とされるものである。MoCro でも *čr は čr で現れる : črljeni (Št crven < *čьrvєнь)。また、*ę のチャ方言の反映形は通常 /e/ だが、/j ž č/ の後では a になる場合があることが知られている : jazik (<*językъ, Št jezik)。MoCro でこれに該当する例は žajan (<*žęďьнь)「渴いた」に見られるが、しかし *žętvа「収穫」は zietva となる。BrCro でもこの語は žatva, žetva の両方があるとされる⁽⁴³⁾。チャ方言全般でも /j ž č/+*ę の反映形には /e/a/ の両方が報告されており、当該音韻環境での *ę > a の変化は、チャ方言に広く観察されるものであるとはいえ、それほど強力な示差的特徴ではないと考えられる。

(6) 上記以外に、MoCro の音韻特徴として、音節末の /l/ が /v/ (語末では [f] と発音される) になることが挙げられる : tako sam kukav (<kukat「見る」の過去形)「そうやって見たんだ」; povnuoč「真夜中」。マレツが教区のクロアチア人のために作成した『祈りと聖歌』でも“... kako si sam Gospodine narediv,” “Ježuš Krištuš došav ... va ruke...” ど、いわゆる 1 分詞に由

39 *dj の反映形は大部分のシト方言では d[dʲ/ɬ] となる。

40 Vážný, “Mluva charvátských osad,” p. 518; Lončarić, “Prilog,” p. 431.

41 Ferdinand Takač, *Rječnik sela Hrvatski Grob: horvatansko-hrvatsko-slovački rječnik sa slovačko-horvatanskim i hrvatsko-horvatanskim indeksom* (Zagreb: Institut za hrvatski jezik i jezikoslovlje, 2004), p. 84; Mijo Lončarić, “Jezik Hrvata u Slovačkoj,” *Kajkaviana i Alia*, p. 416; Vážný, *Čakavské nářečí*, pp. 37–38. なおこれらではそれぞれ *dj の反映形の表記法が異なっているためここでは音素レベルで /dj/ としておく。

42 Gerhard Neweklowsky, *Die kroatischen Dialekte des Burgenlandes und der angrenzenden Gebiete* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1978), p. 88.

43 Božidar Finka, Radoslav Katičić, eds., *Gradišćanskohrvatsko-hrvatsko-nimški rječnik* (Zagreb-Eisenstadt: Garafički zavod Hrvatske, 1991), pp. 835, 837.

来する過去形の男性単数は *v* で表記されている⁽⁴⁴⁾。ほとんどのチャ方言ならびに BrCro では、音節末の /l/ は [u], [l], [(j)a] など で実現されることから、この変化は MoCro に特有のものと考えられる⁽⁴⁵⁾。

2-1-3. 形態統語的特徴

(1) 名詞の形態統語的特徴

MoCro の名詞の形態を、brig 「山」、selo 「村」、žena 「妻」の例で再構成すると、以下のようになる。ここでは参考のために BrCro の標準形を { } に示す⁽⁴⁶⁾

	N	G	D	A	I	L
M. SG	brig {brig}	briga {briga}	brigu {brigu}	brig {brig}	brigom {brigom}	na brigi {brigu}
PL	brigi {brigi}	brigov {brigov}	brigom {brigom}	brige {brige}	brigi {brigi}	na brigov {brigi}
N. SG	selo {selo}	sela {sela}	selu {selu}	selo {selo}	selom {selom}	va seli {selu}
PL	sela {sela}	selov {sel}	selom {selom/am}	sela {sela}	seli {seli}	va selah {seli}
F. SG	žena {žena}	žene {žene}	ženi {ženi}	ženu {ženu}	ženu {ženom}	o ženi {ženi}
PL	žene {žene}	ženov {žen}	ženom {ženam}	žene {žene}	ženami {ženami}	o ženah {žena}

MoCro の名詞形態については特に① /o/ 母音語尾の拡張、②複数形における変化語尾の拡張と融合を指摘しておく。

①チャ方言全般では、語幹末子音の種類によって語尾に異形態が現れ、BrCro 標準形を例にすれば、上掲の brig—brigom (I sg/ D pl) に対して stric—stricem 「叔父」、konj—konjem のように、/om/ の異形態として /em/ が現れる。しかし MoCro では語幹末子音が何であれ変化語尾の母音は /o/ となる：stric—stricom, konj—konjom, jaje—jajom。ただしこの /o/ 母音形の拡張はチャ方言の中にも、また BrCro の北部方言にも観察され、MoCro のみに見られる変異というよりは、MoCro とこれらの方言との連続性を示唆するものと考えられる⁽⁴⁷⁾。

②複数形の生格および与格で、男性名詞の語尾 -ov, -om が中性・女性名詞にも拡張して用いられる。また前置格語尾は、部分的に生格に融合する。複数前置格の BrCro 標準形語尾は男性・中性で -i (<*ih), 女性で -ā (<*ah) だが、MoCro では、上に示したように男性で生格と同じ語尾 -ov, 中性と女性では -ah が確認される。さらに -ov 語尾は、中性・女性名詞においても、とくにこれらが限定辞(形容詞、指示詞、数詞)を伴って前置詞句を構成する場合に用いられる：na naših jezerov 「私たちの(村の)湖で」；va naših stanov a hižov 「私たち

44 Malec, Venhuda, *Molitve i pjesme*. ここに掲載の部分は p. 25 および p. 43 よりの引用。

45 Mogaš, *Čakavsko narječje*, pp. 82–83; Neweklowsky, *Die kroatischen Dialekte*, Karte 22; Lončarić, “Prilog,” p. 430. ただしクロアチアのゴールスキーコータル方で話されるチャ方言(カイ方言との接触がある)にも *l > v > f* の変化が見られることから、MoCro の変化もまったく例外的というわけではないと考えられる。Vida Barac-Grum, *Čakavsko-kajkavski govorni kontakt u Gorskom kotaru* (Rijeka: Izdavački centar Rijeka, 1993), pp. 153–154.

46 Ivo Sučić, ed., *Gramatika gradišćanskohrvatskoga jezika* (Željezno: Znanstveni institut Gradišćanskih Hrvatov, 2003), pp. 92, 108, 116. なお BrCro の標準形とは、ブルゲンラントのチャ方言を標準化したもので、ブルゲンラント州の公的領域で使用される場合の基準とされる。

47 Mate Hraste, Petar Šimunović, Reinhold Olesch, *Čakavisch-deutsches Lexikon. Teil I* (Köln, Wien: Böhlau Verlag, 1979), XXCI; Neweklowsky, *Die kroatischen Dialekte*, p. 197.

の家々に」；*na obah dvih stranov*「両方の側に」。これに対して名詞が直接前置詞の支配を受ける場合には、前置格語尾 *-ah* が用いられる：*na stromah*「干し草の上で」；*va načvah*（< *bačva*）「桶の中で」；*pri vričah*「袋のそばで」。限定辞を伴う場合に *-ov* が現れる傾向が見られるのは、限定辞の生格語尾と前置格語尾が同じ音 [ih] になることに起因しているかと考えられるが、すべての場合にこのパターンが自動的に適応されるわけではなく、限定辞を伴っても *-ah* 語尾になる場合もある：*va tih trih selah*「これらの三つの村では」；*o dvanajstih urah*「12時に」。

以上のように、MoCro では、複数形斜格で男性名詞から中性・女性名詞への格語尾の拡張、および前置格語尾の生格語尾への部分的融合が生じていると考えられる。

名詞の形態統語的特徴としては、前置詞句での前置詞の脱落現象を指摘しておきたい。これは *Osamčetrdesetom lieti sme šli prek granice*「48年に私たちは国境を越えた」のように、本来は“*Va osamčetrdesetom...*”となるべきところで前置詞が脱落するもので、同様の現象は BrCro においても見られるとされる⁽⁴⁸⁾。また前置詞 *s* なしに意味的共格（格形式は造格）が現れる例も観察された：*su šli ljudi sopuonom a ručnikom k Jajšpicu*。「みんな石鹸とタオル（をもって）ヤイシピツ川に行った」；*skupa Trihraščenskim kulturnim društvom*「トリフラステの文化協会（と）一緒に」。ただし前者の場合には、前置詞 *s* が名詞の語頭子音 [s] と融合した可能性があり⁽⁴⁹⁾、後者の場合は *skupa*「一緒に」という副詞が前置詞 *s* の機能を吸収して用いられているとも解釈できる。こうした前置詞句における前置詞の脱落は頻繁に起こるわけではなく、むしろ散発的に見られるものであり、不規則に現れる音声的な現象か、あるいは体系的に考察すべきことなのかについての判断はここでは留保し、BrCro と共通するこのような変則的な現象があることのみを指摘しておく。

(2) 動詞の形態統語的特徴

動詞の時制形には、現在形、1分詞に由来する過去形、(h)tit（< *xotěti, StCro htjeti）の現在形を助動詞とする未来形、未来完了（第二未来）がある。アオリスト、未完了過去は確認されなかった⁽⁵⁰⁾。bit の諸形態は以下のとおり。

現在形 *ja sam ti si on je mi sme vi ste oni su*
 過去形 (sg) *biv/bila/bilo* (pl) *bili/bile/bila* + bit の現在形
 未来形 *ću bit ćeš bit će bit ćemo bit ćete bit ćeju bit*
 未来完了の助動詞 *budem budeš bude budeme budete budu*
 仮定法の助動詞 *bi bis bi bime biste bi*

48 Neweklowsky, “Hrvatska narječja,” p. 460.

49 BrCro でも、共格の前置詞欠如が 18～19 世紀の文字資料に見られる（*neg dičak neka ide svojimi brati*）。しかしこれらも、前置詞句の名詞が /s/z/ で始まっている場合に該当例があることから、音韻的な融合とみなされている。László Hadrovics, “Syntaktische Neuerungen in der Schriftsprache der burgenländischen Kroaten,” *Studia Slavica Academiae Scientiarum Hungaricae* XIX (1973), p. 65.

50 BrCro の標準形でも、アオリスト・未完了過去は体系上示されているものの、事実上は使用されないカテゴリーであるとされている。Sučić, ed., *Gramatika*, p. 197.

ここに挙げた *sme* や *bime* に見られるように、動詞全般で一人称複数形に *-me* 語尾が用いられるが、これはチェコ語との接触の影響と考えられる（後述 2-2-3.）。假定法の助動詞は、チャ方言で *bi* (1 sg, 3 sg/ pl), *biš* (2 sg), *bismo/bimo* (1 pl), *biste/bite* (2 pl) となることが知られている⁽⁵¹⁾。MoCro はこれにほぼ一致する。ただし上記のとおり、一人称複数形は *bime* となる。

動詞の形態統語的特徴では、*bit* あるいは *tit* が助動詞として用いられるさい、後接辞化することを指摘しておく（したがって文頭、あるいはポーズの後の発話の先頭にこれらの要素が現れる）：*zač...*, *ću ti rić kašnje* 「なぜって…、後で話すよ」；*Ćeme jist?* 「食べようか？」；*Sam se dav nutar* 「私は全部中に入れた」（ここではパソコンに「入力した」の意味）。このような接語的助動詞の後接語化はチャ方言、BrCro にも広く認められ、これらの言語と MoCro の共通性を示す特徴の一つと考えられる⁽⁵²⁾。

以上に、音韻面、また名詞および動詞の形態統語的面から MoCro の特徴を示した。これらをまとめると、MoCro は **l>v* の変化や格語尾の拡張・融合など、部分的に独自の変異を見せる部分もあるが、全般的にはチャ方言とくに BrCro に広く認められる特徴を共有すると見ることができる。

2-2. 接触言語の影響

2-2-1. 「借用」について

1-2. で述べたように、モラヴィアに移住したクロアチたちの中で、フリーリシトフなど3つの村においてのみ、クロアチア語が残された。そしてその言語は 2-1. で記述したように、BrCro と多くの共通点を持ちチャ方言の特徴を保持するものであった。だが同時にこの言語は、周囲からまったく切り離されていたわけではなく、周辺の他の言語—ドイツ語およびチェコ語との接触による影響も受けている。以下ではそうした接触言語の影響について記述するが、その前に「借用」について、基本的なことがらを確認しておく。

言語接触論においては、他言語との接触によって生じる言語変化について記述・説明するさいに「借用 (borrowing)」「干渉 (interference)」「移転 (transfer)」など複数の用語が用いられるが、これらの用語は研究者によってしばしば異なる意味で使用される⁽⁵³⁾。本稿では、トマソン&カウフマン⁽⁵⁴⁾に依拠し「借用」を、借用元の供給言語 (S[ource] L[anguage]) の何らかの要素が受容言語 (R[ecipient] L[anguage]) の体系に取り入れられる現象をさす

51 Brozović & Ivić, p. 84.

52 Vážný, *Čakavské nářečí*, p. 96; Neweklowsky, “Hrvatska narječja,” p. 460. ただしこうした接語形助動詞の後接語化のような現象は、これだけを単独で取り上げるべきものではなく、接語形代名詞とどのように接語群を形成するか、またどのようなプロソディー特性をもつかといったことも合わせて論じるべき問題である。

53 ウリエル・ワインライヒ（神鳥武彦訳）『言語間の接触：その事態と問題点』岩波書店、1976年；Donald Winford, *An Introduction to Contact Linguistics* (Oxford: Blackwell, 2003), pp. 12, 16.

54 Sarah Grey Thomason, Terrence Kaufman, *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics* (Berkeley: University of California Press, 1991 [Paperback edition], 以下 Thomason & Kaufman とする), p. 21.

表1 トマソン&カウフマンによる借用の程度

借用の程度	借用のタイプ	具体的な例
I 軽度の接触	語彙借用のみが生じる	基礎語彙以外の語彙の借用
II やや強度の接触	構造的借用が生じる	語彙：接続詞や副詞などの機能語の借用 構造：若干の音韻・形態統語的变化。借用語にともな って新たな音と音素が生じる；本来の体系に影響しない 新たな語順の発生など
III さらに強度の接触	構造的借用がやや増加	語彙：前/後置詞；形態素：借用派生形態素が受容言 語に適応される；屈折形態素の導入（借用語にのみ適 応）；指示/人称代名詞や数詞の導入 構造：音韻化；基本語順の変化(SVOからSOVへなど)
IV 強度の文化的圧力	中程度の構造的借用	構造：音韻体系における弁別特徴の変化；新たな音節 構造；借用された派生接辞や新たな文法範疇の適応
V 非常に強い文化的圧力	強度の構造的借用	類型論的变化をもたらす主要な構造的特徴の変化；形 態音韻規則の変化；語構造・語形成法の変化；形態統 語上の規則の大幅な変化（能格構文の獲得など）

用語として用いることとする。従って借用には、語彙借用、文法形式の借用⁽⁵⁵⁾、あるいは統語上の借用（SVO 語順から SOV 語順への変化など）などが含まれる。

さてトマソン&カウフマンでは、接触による言語変化の状況を5つの段階に分けて表1のように示している⁽⁵⁶⁾。

もちろん、接触による言語変化がつねにこの図式にあてはまるとは限らないだろう。たとえば III 段階に示されるような構造的借用の現象なしに IV 段階の音節構造の変化が見られるといった接触状況もあろうし、また本稿で問題とする西スラヴ語と南スラヴ語のように、もともと系統的に近く、多くの同族語を持ち、基本的な形態統語構造も共通するような言語間の場合、ただちに接触の影響と判断できない場合もあろう。そういった懸念事項を含みながらも、さまざまな接触言語の事例をふまえたこの区分には一定の経験論的妥当性があると考えられる。そこで本稿ではこの区分を言語接触による影響の強さを考える際の参照枠とし、SL（ドイツ語、チェコ語）と RL（モラヴィア・クロアチア語）の関係をとらえてみたい。

2-2-2. ドイツ語からの借用

ドイツ語からの借用は、語彙領域に顕著に見られる。ただしそれらは、語彙体系全体に深刻な影響を与えるものではないと判断される。なぜならそれらはスラヴ語の基礎語彙にとって代わるものではなく、クロアチア人が移住した16世紀から近代に至るまでの時代には存在しなかった事物や、彼らの習慣になかった制度の導入とともにもたらされたものに見られるからである：kšeft「店」（< Geschäft）, šuoljini「靴」（< Schuhe）, pandlica「リボ

55 これは「文法的複製 grammatical replication」と呼ばれることもある。たとえば Bernd Heine, Tania Kuteva, *Language Contact and Grammatical Change* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), p. 2.

56 Thomason & Kaufman, pp. 74–76 を一部省略して掲載。

ン」(<Bündel), pindle「藁などの束」(< Bündel), kontigent「割当分」(<Kontingent), lastauto「トラック」(<Lastauto), prahat「必要とする」(< brauchen), irbat「相続する」(<erben) など。

ドイツ語から供給された語彙の中には、同じ語形が BrCro にも見られ、ブルゲンラント・クロアチア人社会との交流を経由して借用された可能性が考えられる語彙もある(移住クロアチア人社会の交流については次節で述べる): frižak, friško「早い」(<frisch), kukat「見る」(<gucken), lajblj「胴着」(<Leibchen), paur「農夫」(<Bauer), škadanj/štagalj「納屋、倉庫」(<Scheune), šparan「儉しい」(<sparsam) など⁽⁵⁷⁾。

また BrCro では、接触関係にあるドイツ語あるいはハンガリー語の接頭辞付き動詞に対して、意味的に対応する<副詞+動詞>の句形式が用いられることがある: niederfallen/leesni — doli opasti「下に落ちる」, aufheben /felemelni —gori podvignuti「持ち上げる」, zusammenlegen/összetenni —skupa složiti「折り畳む」⁽⁵⁸⁾。MoCro でもこれと同様の句形式の使用が観察される: na rodjiče a starije ljudi sme *naguori kukali* 両親や年寄りに対して私たちは敬っていた (*naguori kukat*「敬う」< aufsehen); *hned su šli va stan nutar...* いきなり家の中に入って... (*it nutar*「中に入る」< hereingehen)。

語彙レベル以外で、ドイツ語を供給言語とすると考えられる借用に、「敬称の三人称」ともいべき三人称複数形の用法がある。これは第三者について語るさいに、その人物が年長で、かつ敬愛や親近感を抱いている場合(したがって主に親族や近所の年長者について語る場合)、三人称複数形が用いられ、それ以外の場合の三人称単数形と区別されるものである

三人称複数形の例:

Muoj died Slunsky *su* tako čuda *povidali*.

私の祖父のスルンスキはそれはたくさん話してくれた。

Puolak Franca *su* tete Minka Kulbingrica *bivali*. *Oni su imali* jednuoga sina Ferdinanda.

フランツの隣にはミンカ・クルビングリツァおばさんが住んでいた。彼女にはフェルディナンドという息子がいた。

「敬称の三人称複数形」は、文の主語以外にも用いられる:

Kadien *su* maja doma došli, *sme njim* *povidali*...

母さんが家に帰って来た時、私たちは彼女に話したんだ…。

三人称単数形の例:

Sin Fritz *je biv* tako star kod ja.

息子のフリッツは私と同じくらいの年だった。

57 friški, kukat, lajblj などは Takač, *Rječnik sela Hrvatski Grob*, pp. 47, 75, 77 にも挙げられている。ただしもちろん上に示した借用語の中には、BrCro からというよりは西スラヴ語経由で MoCro に伝播したもの、あるいは MoCro, BrCro それぞれが自ずから似たような形の借用語を持つに至ったものもあるかもしれない。実際のところ個々の語について借用の歴史を明らかにすることは不可能であるため、ここでは BrCro にも同じ語形があることを示唆しておくにとどめる。

58 László Hadrovics, “Adverbien als Verbalpräfixe in der Schriftsprache der burgenländischen Kroaten,” *Studia Slavica Academiae Scientiarum Hungaricae* IV (1958), p. 211.

Kuharica Berta je bila dalje s njimi.

料理番のベルタはその後も彼らと一緒にだった。

はじめの3例では、話題の対象は近親者や近所の年長者、下の2例は同年者や格別親しい間柄でない第三者で、前者に対しては複数形、後者には単数形が用いられる。このような三人称複数形の用法がいつ頃からどのようにして生じたのか、文字資料がないため推測するしかないが、モラヴィアのクロアチア人は神や Boženek「雷」に対して二人称複数形を用い、その場合に述語が三人称複数になる例が報告されている⁽⁵⁹⁾。これをドイツ語の、対話相手への敬意を表す三人称複数形(いわゆる *siezen*)の借用と考えれば、もともと敬意・畏怖をこめた呼びかけの形式として用いられた三人称複数形が、年長者など尊敬の対象となる第三者に言及する場合に転用され、「敬称の三人称複数形」の形式ができて上がったという可能性が考えられる。ただしチェコ語にも *onikáni*(対話相手に対して三人称複数形を用いる)があったことを考えると、二人称に対する三人称複数の使用というパターンがドイツ語から直接ではなく、チェコ語を経由して MoCro に伝播し、そこで三人称単数に対する敬意の三人称複数という独自の用法になった可能性も排除できない。しかしいずれにせよ元のパターンの供給言語はドイツ語であると考えられることから、ここではドイツ語からの借用の範囲で扱っておく。

2-2-3. チェコ語からの借用

チェコ語からの借用として明らかなのは、語彙および形態素レベルに観察される。

語彙レベルの借用は、日常生活上の語彙に生じている：*rodič, jaro, prši, patrit* など(意味はいずれもチェコ語のまま)。また使用頻度の高い機能語、具体的には接続詞 *až*、前置詞 *pro* などの借用が見られる：*až do večere*「晩まで」；*pruo miene*「私にとって」。

形態素レベルでは、すでに述べたように、動詞一人称複数語尾に用いられる *-me* がチェコ語からの借用と考えられる。また派生形態素 *roz-*, *vi-* の使用も指摘しておくべきことであろう。*roz-*(<**orz-*)は、南スラヴ語では *raz-* がこれに対応する接頭辞であり、また **vy-* に由来する接頭辞(ロシア語で *вы-*、ポーランド語で *wy-* などになる)は、西スラヴ語と東スラヴ語では生産的だが、南スラヴ語圏ではほとんど発達せず、*iz/z-*(<**jъz*)など、その他の接頭辞がこれに代わって用いられている⁽⁶⁰⁾。したがって以下に挙げるような、MoCro に見られるこれらの接頭辞を伴う動詞の使用は、チェコ語からの借用といえるだろう。

roz- の例：*rozbit*「折る、壊す」(StCro *razbiti*, StCz *rozbit*)、*rosčihat* (*čihat*「むしる」、

59 Josef Klvaňa, “Moravští Hrvati,” in Karel Chotek, ed., *Národopis lidu Československého, Díl I, Moravské Slovensko. Svazek II* (Praha: Ministerstvo školství a národní osvěty, 1922), p. 839. なお Vážný, *Čakavské nářečí*, p. 89 には、スロヴァキアのクロアチア人の言語にも同様に「親、祖父など尊敬する人物に対して三人称複数形が用いられる」とある。

60 スロヴェニア語では西スラヴ語とともに **jъz* は *z-* になり、**сь* に由来する *s-* と融合して現代語の *z-/s-* となった。Stephen Dickey, “S-/Z- and the Grammaticalization of Aspect in Slavic,” *Slovene Linguistic Studies* 5 (Kansas: University of Kansas, KU Scholar Works) [<http://hdl.handle.net/1808/1673> (2010年8月1日アクセス)], p. 7.

razčihati「(ばらばらに) むしる、引きちぎる」は BrCro にも見られる⁽⁶¹⁾ が、調査協力者は čuda familijov rosčihali (チェコ共産主義者たちが)「多くの家族を散りぢりにした」のようにも使っている), rozlikovat「区別する」(StCro razlikovati, StCz rozlišit), rostiegnut (StCro rastegnuti, StCz. roztáhnout, 標準クロアチア語の rastegnuti は「引き延ばす」だが調査協力者は「(伸ばした腕で) 届く」の意味で使っている) など。

vi- の例: vibrat「選ぶ」(BrCro zibrati, StCro izabirati, StCz vybírat), vihitit「引き抜く」(< hititi「投げる」), vikopat「掘る」(BrCro (i)skopati, StCro iskopati, StCz vykopat), viskočít「飛び出す」(BrCro/StCro iskočiti, StCz vyskočít), vitakla「持ち上げた」(StCro istaknuti, podići, StCz vzdvihnout「持ち上げる」) など。なお、上に述べたように、南スラヴ語の広い領域で *vy- は消滅したが、チャ方言内部では vi- が用いられる地域のあることが知られており⁽⁶²⁾、また次節でも言及する、移住クロアチア人たちの信仰の支えとなった 1700 年代の祈禱書『金の家』の中に virostuj (<vi-rost-ovati) という vi- 接頭辞形の語がある⁽⁶³⁾。こうした事実を考えれば、vi- 形の接頭辞の使用自体はもともと MoCro に未知のものではなかった可能性も否定はできない。しかしチェコ語・西スラヴ語との直接の接触がない地域の BrCro では z- (異形態は zi-) の使用はしばしば見られるが、vi- を伴う動詞の使用はほとんどない⁽⁶⁴⁾ ことから、MoCro で頻繁に見られる vi- は、roz- とともにチェコ語からの新たな借用と考えておく。

2-2-4. 接触による影響の程度

以上にドイツ語、チェコ語からの借用をそれぞれ示した。ドイツ語からの影響は語彙および若干の句レベルのパターンの借用として現れ、チェコ語からの影響は日常的な語彙や機能語、また派生形態素や屈折形態素に部分的に及ぶ。これらを、先のトマソン&カウフマンの参照枠にあてはめると、下の表 2 のように、それぞれおおよそレベル I「軽度の接触」、レベル II ~ III「やや強度」~「さらに強度の接触」による影響と位置づけられることになるだろう。

表 2 ドイツ語、チェコ語からのモラヴィア・クロアチア語への影響

SL	借用の具体例	借用の程度
ドイツ語	基礎語彙以外の語彙；<接頭辞 + 動詞>から<副詞 + 動詞>へのパターン；「敬称の三人称複数形」	I
チェコ語	日常的語彙・機能語の借用；接頭辞 vi-, roz-；屈折形態素の部分的な借用	II ~ III

61 Finka, Katičić, eds., *Gradišćanskohrvatsko-hrvatsko-nimški rječnik*, p. 566.

62 Ivan Popović, *Geschichte der serbokroatischen Sprache* (Wiesbaden: Harrassowitz, 1960), p. 320. チャ方言の中でも北部地域に見られる特徴であり、Popović は vikopati など を挙げている。

63 István Nyomárkay, *Sprachhistorisches Wörterbuch des Burgenlandkroatischen: mit einem rückläufigen Verzeichnis der Titelwörter* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1996), p. 354.

64 z- の例は zgubiti (Št izgubiti), zručiti (Št izručiti) など。Finka, Katičić, eds., *Gradišćanskohrvatsko-hrvatsko-nimški rječnik*, pp. 818, 829. MoCro と同じく西スラヴ語との接触化にあったスロヴァキアのクロアチア人の言語には vignat, vikopat, višivat など MoCro と同じように vi- 接頭辞の動詞がある。Takač, *Rječnik sela Hrvatski Grob*, pp. 180–181.

3. モラヴィア・クロアチア語の社会的状況

前節で明らかにしたように、モラヴィア・クロアチア語は、ドイツ語やチェコ語から接触による影響を受けながらも、チャ方言固有の言語特徴を保った言語であった。ではこのような実態をもった言語は、どういった社会背景の中で形成され、またいかに維持されてきたのか。3節ではこの問題を、クロアチア人村の社会的状況と結びつけて考察してみたい。以下3-1. ではまず言語維持と言語シフトという観点から移住クロアチア人の消長を全体としてとらえ、3-2. ではクロアチア人村の内部構成と言語維持の問題について取り上げ、3-3. で言語の文化的価値、3-4. で言語の社会的地位という観点からクロアチア人村の言語状況について述べる。

3-1. 言語維持、言語シフトとモラヴィア・クロアチア語

言語接触論では、異言語との接触下におかれた言語集団において生じる状況として、大別して、言語維持 (language maintenance)、言語シフト (language shift)、あるいは接触による新たな言語の形成 (creation of a new contact language) のいずれかを想定する⁽⁶⁵⁾。このうち言語維持とは、ある言語一先の言い方を用いれば、受容言語 RL が、接触相手である供給言語 SL の影響下に変化しながらも固有の音韻・文法特徴を保持してコミュニケーションコードとして維持されるもの、言語シフトとは、言語集団がもとの言語に代えて接触関係にある別の言語を使用するようになり、最終的に接触言語の話者集団に同化するものである。後者の現象の本質はしたがって、接触による言語コードの変化というよりは、使用される言語コードそのものの交換にある。第三のオプションである新たな言語の形成とは、二つの言語の接触状況から、これらのどちらでもないピジン／クリオール言語が生まれ、それが共同体の新たなコミュニケーション言語として用いられるに至るパターンである。これにあてはめれば、南モラヴィアに移住したクロアチア人社会の大部分においては、歴史の中で、どのような過程を経たかは不明にせよ、言語シフトが生じ、クロアチア語は消滅した。いっぽう消滅せずに残ったクロアチア人村の言語は、2節に示したとおり、ドイツ語とチェコ語の双方から接触による影響を受けながらも、もとのチャ方言の特徴が不明瞭になるほどに、あるいはかろうじて基層作用のようにわずかに現れる程度に変容してしまうことなく、古くからの固有の言語特徴を保持した形で集団の言語として維持されたことになる⁽⁶⁶⁾。

65 Thomason & Kaufman, pp. 48–50; Winford, *An Introduction*, p. 11.

66 もちろん、変容を含んだ言語維持と、あらたな混成言語の形成との区別が明確にできるかという問題がある。しかしながら、たとえばブルゲンラント・クロアチア人の祖先と同じく 16 世紀にイタリアに移住した南スラヴ人の子孫がわずかに保持しているモリーゼ・クロアチア語では、3 つの文法的性の区別から男性・女性の 2 性への変化、また名詞の格語尾の大幅な融合など、文法範疇のありかたに関わるような体系的変化が見られる。Walter Breu, “Bilingualism and Linguistic Interference in the Slavic-Romance Contact Area of Molise (South Italy),” in Regine Eckart et al., *Words in Time. Diachronic Semantics from Different Points of View* (Berlin-New York: Mouton de Gruyter, 2003), pp. 363–365; Walter Breu, Giovanni Piccoli, *Dizionario croato molisano di Acquaviva Collecroce: dizionario plurilingue della lingua slava della minoranza di provenienza dalmata di Acquaviva Collecroce in provincia di Campobasso: dizionario, registri, grammatica,*

言語維持がなされるか、言語シフトを起こすかという問題には、人口動態、言語集団をとりまく経済状況、政治・政策、教育制度、言語の文化的価値、社会的圧力、言語行為者の心理などの社会的要因が複合的に関与する⁽⁶⁷⁾。しかしながら、言語間に一定以上の話者人口の差があり、かつ多数派の言語がコミュニケーション効率あるいは社会的地位の高い言語であるような社会では、少数派から多数派への言語シフトが生じるのはほぼ避けがたいといえるだろう。クロアチア人が移住した南モラヴィア一帯は、16世紀に先立つ時期からドイツ人の入植が進められ、クロアチア人の移住前にすでにズノイモからポホジェリツェ (Pohořelice)、フストペチェ (Hustopeče) からブジエツラフを結ぶ線を境にその南にはドイツ語圏が形成されていた⁽⁶⁸⁾。またミクロフより東のレデニツェ、ヴァルティツェ周辺の村には西スラヴ人も入植しドイツ系住民と混在していた⁽⁶⁹⁾。こうした言語環境に、当初から少数派として入植したクロアチア人たちが、多数派であり支配者側の言語であったドイツ語へ、あるいは西スラヴ語へと言語シフトの道を進んだのは、必然的な推移であったとも考えられる。

また、ブルゲンラント・クロアチア人の中に、先祖の入植地からさらに居住地をウィーンやグラーツなどの都市部に移した人が多くいたように、モラヴィアのクロアチア人の中にも、ミクロフやブルノなどより大きな都市に転居した人々もいたと考えられる。再移住先でも言語共同体を構成できるほどの集団であればともかく、そのような集団を形成することのなかったクロアチア人が急速に言語シフトを起こしたことは容易に推測できることであり、そういった人々にとっては「クロアチア」への民族的帰属も早晩意味をなさなくなっただろう。その現代版の例を現在ウィーンで活動する作家ミハエル・スタヴァリッチ (Michael Stavarič) に見ることができる。スタヴァリッチは1972年ブルノ生まれで、両親とともに1979年にオーストリアに亡命したチェコ人だが、彼のは家系は *Stavarič* という名が示すように、クロアチア系—モラヴィア・クロアチア人である⁽⁷⁰⁾。しかしチェコ出身のオーストリア国民であるスタヴァリッチ本人にとって、クロアチア人の祖先を持つことは、おそらく彼自身のアイデンティティの中では特別な意味を持たないのだろう。彼はチェコメディアのインタビューの中で、「スタヴァリッチ」という姓について尋ねられ、こう語っている—「スタヴァリッチというのは、たしかにクロアチア人の名前です。聞いたところでは、モラヴィア・クロアチア人という少数民族のグループが、何百年もの間、ブルノの近くに住んでいたそうです。彼らはもうチェコ人になりチェコ語を話し[...]私の祖先もそういう人たちで、ずっ

testi (Campobasso: Walter Breu & Giovanni Piccoli, 2000), pp. 390–402. このような事例と比べると、モラヴィア・クロアチア語は「言語維持」の範囲内の変化とみなすことができる。

67 Lenore A. Grenoble, Lindsay Whaley, eds., *Endangered Languages: Language Loss and Community Response* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), 22ff; Winford, *An Introduction*, 258ff.

68 Josef Breu, “Prostorni opseg,” p. 44.

69 Kučerova, *Hrvati u Srednjoj Europi*, p. 175.

70 フリーリストフの古い住民帳にも *Stavarič* という姓が記録されている。また調査協力者と一緒に1948年に国境を越えてオーストリアに逃亡した一行の中にもスタヴァリッチ兄弟という人たちがいたという。

とチェコ共和国に住んでいるのです。」⁽⁷¹⁾ 彼の祖先がどのようにして「チェコ人」になったかはわからないが、おそらくこのようにして民族的アイデンティティを変えた人々も少なくなかったと考えられる⁽⁷²⁾。

では多くの移住クロアチア人がドイツ化、あるいはチェコ化し、先祖の言語を失った中で、フリーリシトフ、ドブロポリェ、ノヴァプレラヴァのクロアチア人村だけが言語を維持したのはどうしてなのだろうか。実際のところ、この問いに検証可能な解答を出すことは困難である。小さな歴史の偶然が重なってこれら三つの村を 1948 年までクロアチア人村として残したのかもしれない。とはいえ、異なる言語集団に囲まれた小さな共同体が自分たちの言語を維持するには、それ相応の社会的背景があったはずである。そこで以下ではこの疑問を、クロアチア語が維持された社会はどのような状況にあったのかという問いかけに変え、2 節で明らかにした言語事実に参照しながら考察を試みたい。

3-2. クロアチア人村の構成と言語維持

まず、クロアチア人村の内部構成という点に目を向けてみよう。先に述べたように、クロアチア人たちは当初から少数者としてモラヴィアに入植したのだったが、最後まで言語が維持された三つの村では、移住の当初から近代にいたるまで、クロアチア人が過半数を占めていたと見られる。表 3 は 1691/92 年と 1749-54 年の三つのクロアチア人村の「家族名」から見た世帯分布である⁽⁷³⁾。

表 3 クロアチア人村の世帯分布

	1691/92			1749-54		
	クロアチア人	ドイツ人	チェコ人	クロアチア人	ドイツ人	チェコ人
フリーリシトフ	20	7	9	58	13	12
ドブロポリェ	14	10	7	30	11	5
ノヴァプレラヴァ	17	6	3	18	10	14
計	51	23	19	106	34	31

家族名（世帯数）から見た範囲では、移住から 1 世紀以上が経過した 17 世紀末の時点で三つのクロアチア人村のクロアチア人の数は過半数をやや超える程度にとどまっており、後の時代を乗り越えて言語を維持するに十分な「多数」であるとはいいたいように見える。しかしそれから半世紀後の 18 世紀半ばにはクロアチア人世帯の数が倍以上に増加している。この数の推移には世帯の数え方の異なりも影響していると考えられるが、そのみならず、

71 Vilem Faltýnek, “Stavarič: Mé kořeny vedou k moravským Chorvatům” [http://krajane.radio.cz/cs/article_detail/998] (2010 年 8 月 1 日閲覧, 記事の日付は 2007 年 6 月 18 日)。スタヴァリッチについては、石川達夫氏（神戸大教授）より示唆を受けた。

72 フリーリシトフなどからモラヴィア北部へ移住させられたクロアチア人を親として移住先で生まれた人たちの中には、家庭で親から言語を受け継ぎ、今もある程度モラヴィア・クロアチア語を話すことのできる人が数名いるが、その一人（男性、50 代）も「私はチェコ人だ」と語っている（調査協力者提供の録音資料による）。

73 Jeřábek, “Moravští Charváti,” p. 242. この数値は Turek, “Charvátská kolonisace.” に依拠している。

この間にバルカンのザードルガ（家族共同体）の伝統を持っていたクロアチア人社会の家族形態が変化し、小さな世帯単位に移行したという可能性がある⁽⁷⁴⁾。17世紀末の時点でクロアチア人がザードルガ制を保っていたとすれば、クロアチア人とドイツ人やチェコ人との間の人口差は世帯数の差以上のものであったと推測され、その状態が後の時代に継承されていったと考えることができる。もちろん「姓」がそのまま言語話者の数を反映するわけではなく、姓名の継続性と言語の継承性に必然的な結びつきはないとも言える。しかしクロアチア人村として残った三村以外ではクロアチア人の姓の消失と言語の消滅がともに起こっていることを考慮すれば、古い時代には姓の維持がクロアチア人としての帰属意識および言語の維持と一定の相関をもっていたと考えることに妥当性はあると思われる。

国家による統計調査が行われるようになった19世紀後半から、チェコスロヴァキア時代の1930年代までの間のクロアチア人村の人口構成については、いくつかの資料が残されているが、その一つとして表4⁽⁷⁵⁾に示すフリーリシトフとドブロポリェの住民構成の分布は錯綜した変移を見せる。これは、この間にハプスブルク国家の解体とチェコスロヴァキアの成立という社会的変動があったこと、資料の典拠となる国勢調査の方法がそれぞれの時代で異なること⁽⁷⁶⁾、そしてこうした社会変動をうけて回答者の態度に変化が生じたことが背景にあるといえる。この最後の点については3-4.で再度取り上げることとして、ここでは、表4の両端の年すなわち1880年と1930年の示す値に注目して、この間にどのような事情があったにせよ、クロアチア人が多数派としてここに存在しつづけていたという事実を確認しておきたい。

表4 クロアチア人村の人口構成*

	フリーリシトフ				ドブロポリェ			
	計	クロアチア人	ドイツ人	チェコ人	計	クロアチア人	ドイツ人	チェコ人
1880	1126	854	272	0	657	438	215	0
1900	1160	815	292	53	697	103	566	28
1910	1227	426	756	36	700	101	573	26
1921	1252	554	636	57	696	249	311	136
1930	1268	947	213	108	699	327	156	216

74 Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 83.

75 Gerald Frodl, Walfried Blaschka, *Südmähren A - Z. Kreis Nikolsburg A - Z* (Südmährischer Landschaftsrat in der Sudetendeutschen Landsmannschaft Geislingen/Steige, 2006), pp. 82, 95. なおこの数値は *Historický místopis Moravy a Slazska v letech 1848-1960*, sv. 9, 1984 を典拠としていると考えられる。

76 よく知られているように、オーストリア時代の国勢調査での民族的帰属の指標には「日常語」が用いられた。チェコスロヴァキアになるとこの方針は改められ「民族」を問う方式とした。こうした統計に含まれる問題についてはたとえば Dominique Arel, “Language Categories in Census: Backward – or Forward-looking?” in David Kertzer, Dominique Arel, eds., *Census and Identity: The Politics of Race, Ethnicity, and Language in National Census* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), pp. 100-102.

統計上の数の推移がどうあれ、クロアチア人は実際に居続け、そのコミュニケーションコードとしてのクロアチア語は、村が消滅する時まで維持されたのだが、それを可能にしたのは何よりも、家庭内での言語継承だっただろう。モラヴィアのクロアチア人村を訪れた過去の観察者もこの点に注目し、たとえばチェコのヘルベン (Jan Herben 1857-1936) は「クロアチア人はドイツ人と決して血縁関係を結ぼうとせず、ドイツ人女性を妻にするとしたらその女性はかなりずクロアチア語が話せる場合であり、クロアチア人女性はドイツ人の男性を夫に選ばない」と述べ⁽⁷⁷⁾、クロアチアのクライツも「学校も教会もすべてドイツ語であるにもかかわらず 300 年間彼らがクロアチア語を守ってきたのは、ドイツ人の女性と結婚しないからだ」として、クロアチア人の家庭で親から子へと言語が継承されてきたことを示唆している⁽⁷⁸⁾。もちろん婚姻の実態はこれらの人々が語るほど単純なものではなく、19 世紀にもドイツ人や西スラヴ人との婚姻は一定の数で行われており、1901-1936 年の間の教会の記録によれば、同じ村出身者同士の婚姻はフリーリシトフで 72%、ノヴァプレラヴァで 64%、ドブロポリェでは 57% 程度で、それ以外は他の村の出身者との縁組みであったとされる⁽⁷⁹⁾。ここにはもちろんクロアチア人村も含まれるが、その他ドイツ人が多数を占める村、あるいはスロヴァキア人が住む村なども含まれたはずであり、したがっていずれの村も、同じ村のクロアチア人家族同士が婚姻を繰り返して「村中が全員親戚」というような状況ではなかったと考えられる。また表 4 に示されるように、ドブロポリェではフリーリシトフに比べクロアチア人の割合が減少しており、20 世紀にはいって非クロアチア化が確実に進んでいたこと⁽⁸⁰⁾も事実である。しかしながら全体としては、同じ村の出身者同士の婚姻が過半数を占めており、また村の中核となりコミュニティで指導的な役割を果たした比較的裕福なクロアチア人家庭では、クロアチア人同士の結婚が伝統的であったという⁽⁸¹⁾。おそらくそうした家族が村全体をクロアチア語社会として成り立たせる核となり、他村出身のドイツ人や西スラヴ人を文化的に同化する環境を作り出していたのだろう。そしてまたそうした社会環境が、家庭での言語継承、コミュニティ全体の言語維持を可能にするという循環的な関係を形成していたと推測される。

3-3. 言語の文化的価値

次に言語の文化的価値という点からモラヴィア・クロアチア語の維持について考えてみたい。後述するように、モラヴィア・クロアチア語の社会的地位は、ドイツ語あるいはチェコ語に対して相対的に低いものであった。しかし信仰生活における言語行為の中では、先祖伝来の言語は重要な意義をもっていたと考えられる。

77 Jan Herben, “Tři chorvatské osady na Moravě,” *Časopis Matice Moravské* (1882, XIV, pp. 1-25) in Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 213.

78 Ivan Klajč, *Zemljopis zemalja u kojih obitavaju Hrvati III* (Zagreb 1880, pp. 212-214) in Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 200.

79 Eva Večerková, “Obrady životního cyklu u moravských Charvátů. I. Svatba,” *Folia Ethnographica*, no. 23/24 (1989/1990), pp. 4-5.

80 調査協力者の話でも「ドブロポリェが一番ドイツ化が進んでいた」とされる。

81 調査協力者談話。

ノヴァブレヴァとドブロポリェはともに 1600 年代の終わりまで、フリーリシトフの教会に属していたが、1700 年代はじめにそれぞれの村に教会が建てられた。1700 年代後半までそれぞれの教会には、クロアチア人あるいはクロアチア語でミサを執り行うことのできる聖職者がおり、その後は西スラヴ人が、また 1805 年以後はドイツ人もしくはドイツ語でミサを行う聖職者が配置された⁽⁸²⁾。したがって 19 世紀には教会のミサは「公式」にはドイツ語となっていたが、クロアチア人たちは、司祭のドイツ語の説教を聞きながら、クロアチア語で祈り、また聖歌を歌った。その様子を 1884 年にクロアチア人村を訪れたあるクロアチア人は「(ドブロポリェでは) 毎週クロアチア人が教会で “Otče naš,” “Zdravu Mariju” などを声高らかに唱える」と記している⁽⁸³⁾。この伝統は 1938 年に第三帝国の一部となり、クロアチア語の使用が禁止されるまで続いた。このようにクロアチア人村の人々にとって、「祈る」という言語行為と教会への信仰は、クロアチア語の使用、そしてまたクロアチア人であることと不可分な関係にあったと考えられる。また教会はコミュニティーの中心でありそこに集まる人々のコミュニケーション・ネットワークの核となるものである。教会に集いクロアチア語で祈り、そしてミサの後にクロアチア語で語り合う、こうした生活習慣は言語維持の重要な要因となっただろう。

教会での使用の中では、祈禱書も言語の文化価値を保つのに重要であったと考えられる。モラヴィア・クロアチア語は公的な場でも教育でも用いられたことはなく、日常のコミュニケーション言語にとどまっていたため、文字で書かれる機会はほとんどなかった。そうした言語の文化的価値の支えとなったのが 18 世紀のブルゲンラント・クロアチア人ボゴヴィッチ (Lovro Bogović 1723–1789) が編纂した『金の家 (Hiža Zlata)』という、チャ方言で書かれた祈禱書であった⁽⁸⁴⁾。モラヴィアのクロアチア人はショプロン (現ハンガリー) やアイゼンシュタットなどに出かけた際にこれを入手していたという⁽⁸⁵⁾。これはまた、モラヴィア・クロアチア人が、礼拝と信仰という宗教上の行為においてブルゲンラント・クロアチア人社会と緊密に結びついていたことを示しており、おそらく移住の時以来のこうした交流が、モラヴィアのクロアチア人をドイツ語圏あるいはチェコ語圏の中で孤立させることなく、古くからの言語と伝統文化を維持する支えになったものと考えられる。

3-4. 言語の社会的地位

モラヴィア・クロアチア語のおかれてきた社会的背景の考察の最後に、この言語の社会的地位について述べておきたい。クロアチア人村においては、クロアチア語が日常のコミュニ

82 Lawitschka, *Lipo Naše Selo*, p. 90; Gjuro Kuten, “Tri dana među Moravskimi Hrvati” (*Vienac*, 1884) in Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 236.

83 Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 244.

84 これは 20 世紀に入るまで版を重ね、ブルゲンラント・クロアチア人の中で用いられた祈禱書だった。Nikola Benčić, *Književnost gradišćanskih Hrvata od XVI. stoljeća do 1921* (Zagreb: Sekcija DHK i hrvatskoga centra P. E. N-a za proučavanje književnosti u hrvatskom iseljeništvu, 1998), pp. 77–84. また、すでに言及したドブロポリェの司祭をつとめたマレツが 19 世紀末に村のクロアチア人のために編集した『祈りと聖歌』も『金の家』をもとに作られたものである。

85 Milčetić, *O hrvatskim naseobinama*, p. 11.

ケーション手段として用いられたが、支配言語は、オーストリア時代ならびに第三帝国時代にはドイツ語、チェコスロヴァキア時代にはチェコ語であった。あらゆる文書類はその時代の支配言語で書かれ、また発行され⁽⁸⁶⁾、学校教育もそれぞれの時代の支配言語で行われた。チェコスロヴァキア時代には教育制度の整備が進められ、フリーリシトフには、以前からあった小学校の他に中学校 (měšťanská škola) が設立されたが、授業はすべてチェコ語だった。結局モラヴィア・クロアチア語は文字言語として使用されることがなく、そのため子供にクロアチア語の読み書きを教えたいと考えた親は、祈禱書の場合と同じように、アイゼンシュタットなどに赴いた折にブルゲンラント・クロアチア語の読本を買い求め、それを子供に与えて勉強させた⁽⁸⁷⁾。

もちろん、クロアチア人が政治的に支配される側のみであったわけではない。村長はクロアチア人が代々つとめ、その伝統は 1938 年まで続き、また高等教育を受けて官吏になる者もいた。しかしそれはウィーン、あるいはブルノなどで教育を受け、支配言語の体系の中で社会的上位者となった人々であった。

19 世紀半ばには、南モラヴィアでも工業化や鉄道の敷設が進み、農村社会に暮らしていたクロアチア人、とくに成人男性の多くが共同体の外に出て、ミクロフやフルショヴァニの工場労働者となったり、鉄道関係の職場で働くようになった⁽⁸⁸⁾。またドイツ語あるいはチェコ語の新聞その他の印刷物がクロアチア人共同体に流入した。モラヴィア・クロアチア語にドイツ語やチェコ語からの語彙や一定の文法形式の借用が見られることは 2-2. で確認したとおりである。こうした影響の中には、もちろん、移住の時から長い年月の間の日常的な接触の中で獲得されたものも含まれるだろう。しかし本稿で示した借用の事例や程度を、こうしたモラヴィア・クロアチア人村の社会状況と考え合わせると、それらの多くは、19 世紀後半以後の比較的新しい時代により活発になった外部社会との接触の中で、具体的には経済活動、学校教育、あるいは大衆メディアの発展とともに、クロアチア人村にもたらされたものではなかったかと思われる。

モラヴィア・クロアチア語の社会的地位に関連してここで今一度先に挙げた表 4 の数値に戻ることにしよう。先にも述べたように、ここに示される「クロアチア人」「ドイツ人」「チェコ人」の数は、同じ基準によって調査されたものではなく、またそれぞれの年においてかならずしも実際の民族構成あるいは言語人口を反映しているとは考えられない。たとえばチェコ人は 1880 年には 0 であったのが第一次世界大戦を経てチェコスロヴァキア時代になった 1921 年から 30 年の間にフリーリシトフで 57 から 108 人に、ドブロポリェで 136 人から 216 人に増えている。これは実際にチェコ人が外部から入って来ただけでなく、チェコスロヴァキア建国以後にそれまで「クロアチア人」あるいは「ドイツ人」と称していた人の中に「チェコ人」へと自らの民族的帰属を変えた者がいたことを含んでいると解釈できる⁽⁸⁹⁾。しかしこれ以上に目を引くのは、1910 年代 (ドブロポリェでは 1900 年から) にクロアチア

86 1938 年までは、役所の命令などは、口頭ではクロアチア語でも伝えられたという。

87 Mijo Vašak, "Mi Hrvati u Moravskoj sme bili jako mala manjina," *Hrvatske Novine*, 01.05.1987.

88 Paličević, *Moravski Hrvati*, pp. 95-97. 調査協力者の父親も鉄道員として働いていた。

89 Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 119.

表5 モラヴィア・クロアチア語と接触言語の関係

接触言語	言語の系統的近さ	言語維持への影響	接触のチャンネル	具体例
ブルゲンラント・クロアチア語	きわめて高い (同一方言)	＋：クロアチア語の維持の支え	信仰生活、祈禱書、教材	クロアチア語を使用するという言語行為；ドイツ語語彙
西スラヴ語	高い（同系統）	－：チェコ化の推進	日常的な交流；チェコスロヴァキア時代の行政、学校	日常語彙、若干の機能語、派生形態素や屈折接辞の部分的借用
ドイツ語	低い	－：ドイツ化の推進；クロアチア人側の劣等感	移住の当初からの日常的な交流；オーストリア時代の行政、学校；労働環境	基礎語彙以外の語彙の借用、若干の文法形式の借用

人—この時点では「クロアチア語を日常的に使用する」と自ら称する者—の数が大幅に減少し、それを補完する形で「ドイツ人」が増加している点である。こうした推移を正しく読み取るには、社会的背景、とくにこの時代のモラヴィア南部におけるドイツ人社会とチェコ人社会の力関係、その狭間におかれた極小集団であるクロアチア人村の状況について詳細に検討する必要であろう⁽⁹⁰⁾。だが、少なくとも1900年代に入ってクロアチア人たちがドイツ化した—より正確にいうならば、自らをドイツ語話者と称することでドイツ人とドイツ文化への連帯を示すようになっていたことは間違いないと考えられる。その背後にはまた、クロアチア人であること・クロアチア語を話すことへの劣等感を持つ人々がいたという事実も含まれていると推察される。19世紀末にクロアチア人村を訪問したミルチュェティッチは、フリーリシトフ出身のクロアチア人のある若者がドイツ語で高等教育を受けて「ドイツ化」し「クロアチア人の悪口を吹聴している」と嘆かわしげに記している⁽⁹¹⁾。ヴァージニーも調査の時点で「(モラヴィアのクロアチア人たちは)大部分が自らをドイツ人と称し、最高齢者のみがクロアチア語を話すことができるだけだ」と述べている⁽⁹²⁾。クロアチア語そのものは、本稿の調査協力者が実例であるように、村が消滅する1948年まで使用されていたのだが、ヴァージニーのこの記述は、現下に問題としている1910年～20年のクロアチア人村の人々の言語態度と合致しているといえるだろう。ドイツ語は、モラヴィア・クロアチア語の実態に対して、体系的な変化を引き起こすような大きな影響を与えるには至らなかったが、威信言語として、クロアチア人社会に、ドイツ語への言語シフトを引き起こす潜在的な力となっていたと考えられる。

ドイツ語あるいはドイツ文化への傾倒ということと相関して興味深いのは、1930年の数値で、「ドイツ人」が大幅に減少し、クロアチア人の数が多数派に復活している点である。この時期に500人もの「ドイツ人」と「クロアチア人」の人口移動があった記録はなく、こ

90 調査協力者は、この時代の「クロアチア人」の数の推移について「まったく政治的な問題だ」と語っている。

91 Milčetić, *O hrvatskim naseobinama*, p. 13.

92 Vážný, *Čakavské nářečí*, p. 8.

れはおそらく、一度はドイツ人と称したクロアチア人たちが、民族を問われて、今度は「チェコ人」と称し始めるのではなく、ふたたびクロアチア人であると主張するようになったものと考えられる。1920年代後半には、ミクロフのドイツ系住民たちが政府の税制に反発し、そこに同調したクロアチア人も反チェコ感情を強めたとパヴリチェヴィッチは指摘しており⁽⁹³⁾、そうした社会背景から推測すれば、ここには「チェコ人」になるよりは親ドイツ的なクロアチア人であることを選択したクロアチア人たちの態度が反映されているとも考えられる。言語の実態という点から見れば、チェコ語は、チェコスロヴァキア時代に国家公用語となり、クロアチア人社会においても上位言語となって、学校教育や行政のチャンネルを通じてクロアチア語に影響を及ぼしたと考えられるが、クロアチア人たちは、必ずしもそうしたチェコ語優位の社会を歓迎した訳ではなかったのかも知れないのである。

3-5. モラヴィア・クロアチア語の社会状況と言語接触の実態

最後に、3-4. までに述べたことを、言語接触という問題とあわせて整理してみよう。モラヴィア・クロアチア語と接触関係にあったのは、ブルゲンラント・クロアチア語、チェコ語・西スラヴ語、ドイツ語であり、それぞれが日常的な交流をはじめ、信仰、教育、行政、労働環境などを通してさまざまな影響を及ぼした。ブルゲンラント・クロアチア語は、同じクロアチア人の言語として、そしてまたほぼ同じ実態をもつ言語として、モラヴィア・クロアチア語の使用を実質的に支え、言語維持を可能にする力となった。しかしまたその交流の中で、ドイツ語の借用といった影響ももたらした可能性も考えられる。西スラヴ語、とくにチェコ語は日常的に使用される語彙や形態の供給言語として、またチェコスロヴァキア時代には共同体における社会的上位言語として、モラヴィア・クロアチア語に実質的影響を及ぼした。ドイツ語も、経済活動や教育制度などを通して、クロアチア語に借用の影響を及ぼし、またクロアチア人の中にドイツ人・ドイツ文化への連帯感、あるいはまたクロアチア語を使用すること・クロアチア人であることへの劣等感も生み出した。このようにチェコ語、ドイツ語の双方から言語コードとしての実質的影響を受け、また社会・文化的圧力を受けながら、モラヴィア・クロアチア語は、信仰という文化的価値を核にコミュニティーの言語として機能し、古いチャ方言を代々受け継いだ言語として存続していたと特徴づけることができるだろう。

おわりに

南モラヴィアのクロアチア語を消滅させたのは、20世紀前半のヨーロッパ全体を巻き込んだ歴史の流れであっただろう。1930年代のナチスの台頭、妥協の産物であったミュンヘン会談、第二次世界大戦、そして戦後のチェコスロヴァキアさらには東欧を支配した共産主義政権の確立—こうした一連の大きな出来事が、小さな言語共同体の運命を決定した。とはいえ、仮にクロアチア人たちが第二次大戦後も先祖伝来の村から追放されなかったとしても、クロアチア語がそのまま維持されたかどうかは疑わしく思われる。第一次大戦後のチェ

93 Pavličević, *Moravski Hrvati*, pp. 121–123.

コスロヴァキアにおいて国家を脅かすほどの「少数民族」であったドイツ人とは異なり、少数民族として認知されるにはあまりにも少数であったクロアチア人は、言語の権利に関しても何も要求できず、1920年代に出された小学校低学年のクロアチア語の授業導入の要望も退けられた⁹⁴⁾。ヴァージニーが記録したドブロポリェの住民の言葉にはこうある— *Duoma govorime hrvacki. A naša dica govoriju moravski*. 「私たち（話者と夫）は家でクロアチア語を話します。でも子供たちはモラヴィア語を話します」⁹⁵⁾。もちろんこれが当時の村の全状況を表していたわけではないだろうが、この時点でもチェコ語への言語シフトが進行しつつあったと考えれば、クロアチア人たちが第二次大戦後も村に暮らし続けることができたとしても、チェコ語への言語シフトをとどめることはできなかったのではないかと想像される。

本稿では、モラヴィア・クロアチア語という極小集団の言語を取り上げ、言語記述とその社会的背景の考察を組み合わせた言語研究の事例を提示した。モラヴィア・クロアチア語自体は、言語共同体を失ってすでに60年、母語話者の数はわずかとなり、今後のさらなる記述研究は困難であろうと思われる。しかしながら、たとえばブルゲンラント・クロアチア人社会との交流や、移住クロアチア人をとりまく社会の歴史をさらに調査し、それを過去の観察者が書き残した資料や、現存する話者から得られる言語の実態と関連づけながら、本稿で示したようなアプローチをより精密化して一つの共同体の言語運用の実態を明らかにすることは可能であるだろう。これを、従来の「記述研究」とは異なる意味の記述研究とするのであれば、この言語を対象とした記述研究にはさらに発展させる余地は十分にある。これは筆者の今後の課題としなければならない。

最後に、言語学の研究領域からははずれるが、この言語の担い手であったクロアチア人村を歴史研究の一つの題材として、たとえばチェコスロヴァキア近・現代史、あるいは1920年以後のチェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアの関係史などを、ほとんど歴史叙述の表に現れることのない極小民族の存在を軸に捉え直すというような形で考えるのもまた、興味深いことではないかと思う次第である。

94 Milo Vašak, “Pisma, sjećanja, pjesme, jezik,” in Pavličević, *Moravski Hrvati*, p. 304.

95 Vážný, “Mluva charvátských osad,” p. 521.

Croatian in South Moravia: Language Maintenance and Sociolinguistic Circumstances

MITANI Keiko

This paper describes the linguistic features of Moravian Croatian (abbreviated to MoCro), a regional variation of the South Slavic Čakavian dialect once spoken in the southernmost part of Moravia, and examines the sociolinguistic circumstances under which MoCro has been used.

The paper is divided into three sections. The first section outlines the history of the Croatian inhabitants in South Moravia, referring to previous studies on Croatian ethnic elements in Moravia and adjacent regions. The second section focuses on MoCro and reveals that it retains Čakavian features but shows at the same time peculiarity as a result of language contact. Based on these findings, the third section deals with the sociolinguistic circumstances to which the Croats in Moravia accommodated themselves. The goal of the paper is to present how social factors can be relevant to language maintenance.

The Moravian Croats as well as the Burgenland Croats living in the Austrian state of Burgenland are descendants of ethnic Croats migrated from the northwest part of the Balkan Peninsula during the sixteenth century. In the course of history, most of the Croats settled in South Moravia were assimilated into German or Czech populations, and Croatian trails were lost except for in the three “Croatian” villages of Frielištof (present day Jevišovka), Nova Prerava (Nový Přerav), and Dobro Polje (Dobré Pole). The Croats in these three villages maintained their inherent language as a communication code up to the mid twentieth century. After World War II, however, the Czech Communist regime made a decision to displace the Croats to the northern parts of Moravia, by which the tradition of Croatian culture and language in Moravia was terminated.

The author of this paper has conducted research on MoCro and its background history with help of a Croat born in Frielištof. The linguistic analysis shows that MoCro has kept prominent Čakavian features, such as diphthongization of the mid-high vowels, usage of the typical Čakavian interrogative words *ča*, *zač*, and *kade*, and reflex of **ě* according to “Meyer-Jakubinski’s law.” In MoCro, at the same time, particular change induced by language contact is observed: German influence is attested particularly at the lexical level, but partly on phrase syntax as well, and Czech influence is manifested in the borrowing of derivational morphemes, verb-inflectional morphemes, and basic functional words. Thus, MoCro can be characterized as a linguistic code with inherent Čakavian features but modified by the language contact situation.

The author further discusses the sociolinguistic circumstances of Moravian Croats and unfolds positive and negative factors in its maintenance. Demographic materials and anthropological findings suggest that endogamy was a significant, although not overriding, factor in language secession. Religious value attached to the language in question is considered to be crucial as well, as the Croats in Moravia hold a tradition of praying in MoCro and rely on a prayer book written in Čakavian in the seventeenth century. In terms of the social status of the language, however, MoCro is characterized as “low,” dominated by the “high” languages of German and Czech: German had been a prestige language all

through the history of the Moravian Croats up until the beginning of the twentieth century; Czech somehow replaced German in the independent Czechoslovakia after World War I. Due to this low social status of being a language of home use and daily communication, MoCro lead the Croats to represent themselves as Germanophones at the beginning of the twentieth century.

Overall linguistic analysis and examination of the sociolinguistic circumstances of the Moravian Croats has led the author to conclude that MoCro at the time of destruction of the Croatian villages subsisted through a balance of language maintenance and language shift.